2019.9.7　GEWANDHAUS 龍ヶ崎ゲヴァントハウス【オリジナルCDコンサート】

没後50年 大ピアニスト バックハウスと20世紀

プログラム

今年は20世紀最大のピアニストと言われ、1969年に亡くなった**ヴィルヘルム・バックハウス（1884.3.26～1969.7.5）**の没後50年に当たります。今日はこの大ピアニストと、同じ時代に活躍したヴァイオリンの巨匠**ダヴィッド・オイストラフ（1908.9.30～1974.10.24）**、大指揮者**カール・ベーム（1894.8.28～1981.8.14）**の演奏を合わせてお楽しみください。

ヴィルヘルム・バックハウスは1884年3月26日ライプツィヒで生まれました。7歳からピアノを始め、ライプツィヒ音楽院でアロイス・レッケンドルフに師事。1890年には当時の名ピアニスト、オイゲン・ダルベールが彼の才能を高く評価したことからフランクフルトに移って主にベートーヴェンの解釈法を学びます。ダルベールはフランツ・リストの門下生で、リストの師匠はツェルニー。そしてツェルニーの師匠はベートーヴェン本人に当たるため、実はバックハウスはベートーヴェン直系の弟子という事になります。1900年、16歳という若さで国内を演奏旅行し、同年にロンドンでデビュー。1901年にはアルトゥール・ニキシュの指揮でドイツでもデビューし大成功を収めます。1905年、パリのルビンシュテイン国際コンクールで優勝。1912年にはアメリカ・デビューにも成功します。その後、マンチェスター王立音楽院やカーティス音楽院で教鞭を執りますが、以降教職にはつかず生涯を演奏家として活躍しました。1969年6月26日と28日、バックハウスはオーストリア南部の「ケルンテンの夏」音楽祭のこけら落としのコンサートに出演、オシアッハ修道院教会で演奏会を開きました。しかし、28日のプログラムであるベートーヴェンのピアノ・ソナタ第18番を第3楽章まで弾いたところで苦痛の表情を浮かべ、自身の言葉で「少し休ませて下さい」と言い、短い休憩を取りました。休憩後はプログラムが変更され、ベートーヴェンのソナタは未完に終わってしまいました。それから約一週間後の7月5日バックハウスはこの世を去りました。その昔バックハウスは“鍵盤の獅子王”として知られていました。しかし晩年になるにつれ、技巧が衰え始め、スケールの大きな豪快さは影を潜めていきます。それでも彼の芸術が生き続けるのはピアノに対する確固たる信念と深い味わいが我々の心を揺さぶるからではないでしょうか。

＊＊＊＊＊＊＊

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）：
ピアノ・ソナタ第30番ホ長調op.109～第3楽章
ヴィルヘルム・バックハウス(ピアノ)
（1969.4.18　ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive）

ヨハネス・ブラームス（1833～1897）：
ピアノ協奏曲第2番変ロ長調op.83～第1楽章、第4楽章から
ヴィルヘルム・バックハウス(ピアノ)
ダヴィッド・オイストラフ指揮ウィーン交響楽団
（1968.6.1　ウィーンでのLive）

ヨハン・セバスティアン・バッハ（1685～1750）：
ブランデンブルク協奏曲第4番ト長調BWV.1049
ダヴィッド・オイストラフ(ヴァイオリンと指揮)フィンランド放送交響楽団
（1970.5.14　ヘルシンキ、ハウス・オヴ・カルチャーでのLive）

＊＊＊ 休 憩 ＊＊＊

ウォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1856～1891）：
ピアノ・ソナタ第11番イ長調k.331“トルコ行進曲付き”
ヴィルヘルム・バックハウス(ピアノ)
（1969.6.26　オシアッハ・シュテイフト教会でのでのLive　ケルンテンの夏音楽祭から最後の演奏会）

アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）：
交響曲第9番ホ短調op.95“新世界より”～第1楽章、第2楽章、第4楽章
カール・ベーム指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
（1978.8.6　ザルツブルク祝祭大劇場でのLive）

★ホームページアドレス　http://gewandhaus.sakura.ne.jp/wp/